

## 国際エチオピア学会に参加して

山形孝夫

私のフィールドの旅は、1962年のアメリカにはじまり、中東のレバノンやエジプトのコプト修道院を経て、エチオピアの「青ナイルの修道院」へと続いている。

振り返ると、はるか若い日に遭遇したくフィールドの風景が、その後の旅の原点となったようにおもわれる。旅の途上、折にふれて嘸みしめる言葉が二つある。

ひとつは、大塚久雄の「視野は広く、問題はせまく、鋭く」。もうひとつは、宮本常一の「歩く、見る、聞く、考える」。いずれも、よく知られた言葉だが、これを持ち歩くことが、私のフィールドの旅だった。

今回の第13回国際エチオピア学会は、私にとって、私のフィールドの旅の終着点にふさわしい記念すべき学会であった。

公開講演「エチオピアからの発想」は、縄ばりのないユニークな構造をもつゲラダヒヒの社会の話や、多民族国家における政治のあり方にたいする鋭い女性からの発言など、国際エチオピア学会ならではの、学際的独自性が遺憾なく発揮されたすぐれた

企画であった。

私自身も、演者の端くれに加えていただき、「生者の癒し・死者との共食」というテーマで話したが、内容はともかく、私にとって、エチオピアのキリスト教において、私が最後にたどりついたテーマの総集篇ともいうべきもので、感慨は複雑だ。この問題を、今後どのように深め、そして掘り下げていくかに、残りの時間を集中したいと念じている。

最後に、この国際学会を成功裏に導いた老練なヴェテランの並々ならぬ知恵と、それを支えた事務局の若い力に、心からの敬意と感謝の言葉を添えた。

とりわけ、福井、栗本、重田氏による *Ethiopia in Broader Perspective* 全三巻の刊行は、学会にとって、まことに画期的な記念碑ともいうべき偉業である。並みの努力ではない。感動は大きい。

(やまがた たかお

第13回国際エチオピア学会組織副委員長、  
日本ナイル・エチオピア学会副会長)



[写真] 公開講演「エチオピアからの発想」で挨拶する河合組織委員長。右は司会の福井実行委員長 (97.12.13. ホテルサンフラワー京都)。